

# 広報 土づくり



創刊 第2号  
発行所  
(株)土屋  
土屋新聞  
土づくり編集部

皆様、初めまして。株式会社土屋取締役・最高文化責任者の古本聡(こもとさと)です。これから広報「土づくり」の紙面を通してクライアントの皆様、ご家族の皆様様々なご声をお伝えしていきたいと思っております。何卒、よろしくお願いたします。

## コミュニケーションの大切さと課題

つい最近、重度の全身分かつてきました。

障害を持つ男性と知り合いました。その方は、言葉が発する機能も失っています。彼が障害を負ったのは中学生の頃で、自分の意思を周囲に伝えられなくなった事に最初は動揺したそうです。しかし「あーん」までの文字を読み上げてもらい、該当する文字の所で唯一自分の意思で動く右腕で合図をして、通訳を兼ねるアテンダントに発話してもらうという独自の話し方を編み出し、大学院まで進学し、今や大学で教鞭をとるまでになりました。

最初にお話しした時には、脳性麻痺で運動機能障害と発語障害を持つ私でさえもやや戸惑いました。でもよく見ていると、アテンダントが時には先読みをして、また時には確認しながら彼の言いたいことを効率的に代弁しているということが



が食べたいが、いつもの福神漬けではなく今日はラッキョウを付けてくれと言いたい場合には、先読みだけでは正しい意思伝達が不完全だということでした。また、先読みしても「うん」と慣れず、自分の意志で何かをしようという気持ちがあると減っていき、この話を聞いてくれました。これは私にも覚えがあります。

5月8日(土) 第1回  
シンポジウム「共生」フォーラムを開催！  
重度障害者の「生きる」を考える  
(主催：土屋総研)

出席者：村木厚子(元厚生労働省事務次官)  
浅野史郎(元宮城県知事・元厚生労働省障害福祉課長)  
長岡貴宣(A.L.S患者である広島県立御調高等学校の元教頭)  
当社より、高浜敏之(代表取締役・吉田政弘(土屋総研代表))  
会：原えり(最高法務責任者)

本フォーラムでは、重度訪問介護制度の在り方や、障害福祉の現状と未来について、活発な意見が交わされました。村木厚子さんからは、厚労省時代に携わった障害者自立支援法策定の背景を、浅野史郎さんからは、行政との協同の必要性や、重訪を通じて「社会を変える」との想いを、長岡貴宣さんは、分身ロボット「オリビュス」を介して、地方の実情や就労問題など制度の課題についてお話しされました。こうした中、当社では介護難民問題の解消に向け、全国津々浦々に支援を届け、行政や他事業所と協力して障害者の在宅生活を支える決意を新たにしました。参加者は500人を超え、大盛況で幕を閉じた第1回シンポジウムフォーラム。次回はこの模様を詳しくお伝えします。

## 家族 あるある 笑っている場面

脳性麻痺1種1級の夫は当然の事(?)発語障害があります。いくら普段から聞き慣れていても、過緊張で呼吸が整わず浅い呼吸しかできず、声を出そうとする時に喉と口の筋肉がこわばって発語する調子が悪い時、声が小さく聞き取れないとか、訳の分からない言葉にしか聞こえないといった事があります。

昔の事です。「ドーナツうんこもらえる」と聞こえた事がありました。正解は「ドラミちゃん冷温庫もらえる」。某引越屋のTVコマースの話をした。こんな事はしょっちゅうで、ひどい時には、「ちよこーにちよこーとこなーとびこーしちやう」とロシア語でも話しているのかと思ったら「遠くにやっこかないとひっくり返しちやう」と、普通の日本語でした(ちなみに夫はロシア話者です)。最後の部分しか合っていないですね。

過緊張で息を吸って吸って・・・吐けないって状況、笑っている場合じゃないですね。でも、他人に障害の事で笑われると腹が立ちますが、家族間では笑い合える不思議。我が家では聞き間違えた言葉を速攻でメモしてネタにしています。夫も「ひっでーな」と言いつつ満面の笑みで許してくれています。古本由美子

### 「広報 土づくり」へのご意見・ご感想

今後取りあげてほしいテーマなどをお聞かせください。

また、ホームケア土屋、訪問看護ステーション土屋のサービスについて、株式会社土屋の取組みについてのご意見もお寄せください。



ご意見・お問合せ窓口

client@care-tsuchiya.com

### 株式会社 土屋

本社：岡山県井原市井原町192番地2久安セントラルビル2階  
土屋ケアカレッジ8拠点・ホームケア土屋36拠点  
訪問看護ステーション土屋1拠点  
総アテンダント数：約1000名(間接部門含む)  
総クライアント数：約600名 2021年4月1日現在

